

『文肝抄』における賀茂家の始祖伝承について

室田 辰雄

〔抄 録〕

鎌倉期に暦道家賀茂家は分化し、中世的家を確立した。十世紀に活動した賀茂保憲を自らの家の始祖として、様々な口伝や、家伝を創りあげていった。その中でも、中世賀茂家の祭祀次第書である『文肝抄』に見られる保憲についての記述を取り上げた。結果、院政期末に活動した賀茂在憲と併記されることが見えた。在憲は中世賀茂家の祖ともいうべき人物であり、室町期に興る勘解由小路家につながる賀茂家嫡流の祖である。その在憲が、賀茂家

の祖ともいうべき保憲と併記される意義について説いた。

特に五帝祭・本命祭という、王権の守護、及び天文に関しての祭祀の次第に彼らの名を挙げることで、安倍晴明・泰親を立てる陰陽家安倍家に対して対抗し、独自の言説を創りあげていたことについて考察を試みた。

キーワード 賀茂在憲、中世陰陽道、『文肝抄』、五帝祭、本命祭

はじめに

中世暦道を担った賀茂家は主に京を中心として活動していた陰陽家である。他の貴族と同様に、院政期から鎌倉期にかけて複数の家に分かれた。^①家が分化するなかで、競合相手がひしめく宮廷陰陽道において、いかに独自性を保つことができたのだろうか。第一には造暦活動、特に具注暦の作成、それに伴う日々の吉凶や禁忌の解釈の差異を示す

ことであろう。第二には、祭祀活動によって独自性を発揮しようとした。^②こうした活動の根拠に、「家伝」として所謂、始祖の説を挙げるものがあつた。こうした始祖には様々な伝承が子孫によって作られていった。

同じく陰陽家である安倍家を例に挙げると、始祖晴明を立て、様々な伝承を作り上げた。それを中心的に行っていたのは、院政期末に活動した泰親一家とされる。^③こうした活動を経て天文道安倍家嫡流の地

位を磐石とした泰親一家の流れを組む流派は、陰陽頭安倍忠尚の段階において暦道に關与しようと画策したこともあった。⁵⁾

一方賀茂家ではどうであったか。『新猿樂記』には賀茂道世なる人物が理想的な陰陽師として記述されている。鎌倉初期では賀茂忠行・保憲・光榮・守道・道平・道言・光平・陳經・道榮・家榮が陰陽師として『二中歴』には見える。これは安倍晴明、吉平に対して保憲といった構図がみえる。保憲については『覚禅抄』『阿婆縛抄』などの密教の事相書において、応和元年(九六一)に起こった村上天皇の本命日を選定する論争が記されていることが有名である。また『今昔物語集』にはその父忠行との説話が著名であり、見鬼の術を持っていたことで知られる。

こうした賀茂家の伝承は、中世にはどのように展開したのだろうか。それを見ていく前に、同じく陰陽家である安倍家側の伝承を確認すると、『平家物語』にも登場する泰親が著名である。泰親は、「指神子」と称され、古記録上においても藤原頼長や九条兼実に勤仕し、高い評価と信頼を得ていた。この背景には泰親一家による顕彰活動があったとされる。この泰親に対して、賀茂家側にいかなる人物がいたであろうか。

そこで浮上する人物は賀茂在憲(一一〇二〜八二二)である。康和四年(一一〇二)、賀茂宗憲の子として生まれた。陰陽家賀茂家の祖忠行から数えて八代目に当たる。陰陽博士(長承二年・一一三三)「除目大成抄」。陰陽助(久安元年・一一四六)「平戸記」。陰陽頭(保元元年・一一五六)「平戸記」。(養和二年・一一八二)歴任し、養和二

年四月十七日に没した。

安倍泰親と同時期に活躍した陰陽師であり、後白河院政権下にて陰陽頭を務めた。泰親に比べると印象の薄いイメージであるが、二十六年にわたり陰陽頭に在任し、鳥羽院、後白河院に仕えた。その子在宣と共に中世暦道賀茂家嫡流の祖と見なすことの出来る人物である。なお『文肝抄』編纂と関連のある在親は在憲の孫に当たる。

少し在憲の代表的な事跡をあげてみる。

○保延六年(一一四〇)一月、石清水八幡宮の御体が破損した事に対して、御占を安倍泰親、安倍広賢共に行う。占文を巡って、泰親と争論があった「諸道勘文」

○保元三年(一一五八)平信範に造作儀礼について問われ答える「兵範記」

○永暦元年(一一六〇)十月二十二日、後白河上皇より信濃国大宮庄に關する請文を給わる。「平安遺文」

○仁安三年(一一六八)六月二十三日、清原定俊が奏上した金神の禁忌に対し、安倍泰親と共に反対する。「兵範記」

○建仁元年(一一二〇)一月二十三日、土御門天皇が二条高倉亭へ御幸する際に反閉を勤める。「猪隈閑白記」

後世の記録では、安貞元年十二月十五日の除目において、賀茂在親が正四位上に叙せられた際に、在憲が五龍祭を行った賞を譲ることによる叙位があった。「平戸記」

○永承二年(一一三三)一月二十八日主計頭在憲が仏舍利を造る日時

を勘奏している日時勘文が見える。『平戸記』寛喜元年六月二十六日条」

このような細かい事跡を挙げると枚挙に暇がないが、『玉葉』においては、日時勘進や、移徙・造作について意見を求められることが多い。それは泰親・泰茂親子や時晴・晴光親子と比較しても圧倒的に多く、陰陽頭という立場を考慮しても、兼実が在憲を重用していたと考えられる。在憲は泰親らと異なり直接、賞賛される記事は確認できないものの、院政期末を代表する陰陽師の一人であることは間違いないであろう。

ここで本論において、賀茂在憲に着目した理由を述べる。『文肝抄』諸祭祓の第一の祭祀に、大法として記述されている五帝并四海神祭の次第において、賀茂保憲・在友とともに、五帝祭を執行した人物として取り上げられているためである。また在憲は『文肝抄』本命祭の次第にも確認できる。こちらの記事は、嘉応二年（一一七〇）十月二十八日に、神前二十五前で行ったことが見える。さらに注目されるのは、ここでも保憲の名前が確認できることである。陰陽家賀茂家の祖の一である保憲の名を併記することはどのような意味を持つのだろうか。さらに通常十二前で行う本命祭を、二十五前という大規模な形式にしたことも注目される。この通常の祭祀と、大規模で行なう差異について論じる。また本論では詳述しないが、四十二座咒咀祭にもその名が確認できる。⁶⁾

本論では『文肝抄』に記述される賀茂在憲の分析を行うことで、中

世前期における陰陽道の特質の一端を明らかにしたい。さらに、鎌倉期賀茂家嫡流であったと考えられる在親一家の在憲に対する意識を考えようと思う。そこからは在憲を始祖として顕彰しようとする意識が窺えるのだ。

以下具体的に二つの記事の分析を行う。

第一章 五帝祭と神器観

本章では五帝祭にまつわる言説創造について述べる。詳細は後述するが、院政期から鎌倉後期にかけて、天曆四年（九六〇）九月二十四日の内裏火災で焼失した霊剣を再鑄造する際に、執行した五帝祭に関して史実の上では賀茂保憲を中心として行っていたが、安倍晴明が実行したとの言説を晴明自身が喧伝した。以来、安倍家中心で五帝祭が行われたという言説が定着したとされる。以上の事を踏まえて『文肝抄』の記事を確認する。

『文肝抄』（翻刻・句読点は筆者による）

五帝并四海神祭神座^{九七} 御撫物^{鏡二面}為兩祭故也

此御祭者邇迨事也、在支云、仁治元年八月廿八日

御勤仕之曩祖保之在憲等御勤仕云、季尚リ去年勤仕之曩祖晴明之

勤仕以件例可行之由、令上奏云、而傍輩等極虚誕^{也カ}■勤仕之時

晴明^{被カ}具官云々、又今度御虫^{鏡敷}■一面被置中央棚、有^{九カ}星反問

宗春誦咒^{中音也}、又被進歷名云々亡父在直令勤仕具官^{給カ}■記不見、

頗不審也、家繁記也、^{門徒也}

礼、勅使先^ニ■御無物^{持カ}、次四海神御祭、上物具立具五帝御祭具、無別作法如普通祭、

無反閑、巡見灑水、次奉礼、次誦祭文、祭後渡御無物、勅使退出之後、焼■御祭神供具、数供具調脩、同五帝御祭仍不注之、具官者歴名与見悉相違随事、具官者如此、此祭有勤賞欵、

五帝御祭用物四海旧物ハソハニ注之也

《中略》

仁治元—八月日 陰陽助

四海神御祭用物注付之、合點之外件神祭不入之、合點定也、五帝并四海神為御願成就、再被作神器重宝等時祭之、斎籠以下用途等大略同地震

右のように在支の説として、仁治元年（一二四〇）八月二十八日に五帝祭が行われた。保憲、在憲といった賀茂家を代表する人物によって行われて以来、「邂逅」（まれ）に行われるとしている。一方安倍孝重（安倍泰親の孫）の子、権天文博士季尚も「去年」に行った。それは安倍晴明が行った例に則り、祭祀が行われたとしている。それに対し、晴明の例は「虚誕」（嘘）であり、晴明は具官として参加したことに過ぎず、祭祀における補助的な役割であったことを示す。さらに仁治元年（一二四〇）八月に陰陽助こと賀茂在友によって行われたとしている。

この記事にはいくつか問題が見える。まず五帝祭なる祭祀が仁治元年八月二十八日の他記録から確認しがたい点。同様に在憲が行った記

事も他の記録から見出せない点。五帝祭と靈剣鑄造にまつわる言説が安倍家主導で主張されていた点である。

これらの問題を明らかにすることで、『文肝抄』における記述された祭祀の特徴を説明しようと思う。

五帝祭についての先行研究は小坂眞二氏のものがある。小坂氏は反閑が執行される陰陽道祭祀を紹介する中で、五帝祭について挙げ簡略に説いた。それによれば、別名三公五帝祭ともいう。名称の由来は節刀の二剣の一つ破敵剣、別名三公戦闘剣、ないしはその図形の一つの三星五帝形から来たとしている。特に節刀造進の際行ったとする。さらに『文肝抄』を引用し、本祭で行われている九星反閑は、安倍家の作法であったとする。この根拠として歴名の形式から季尚が九星反閑を行うと主張したのに対し、在友は行わなかったと解説している^⑦。

一方、山下克明氏によれば、五帝三公形や北極・南斗・北斗・四神形を有す靈剣を造る為に、五帝祭を行うことにより五帝や星辰等の天の神々に降臨を願い、その精気を剣に付着させることにあると考察されている。さらに大刀契に纏わる資料『反閑作法并作法』を若杉家文書内から紹介された。また、五帝祭について『村上天皇御記』や『藏人信経私記』、『左大史小槻季継記』（以下『季継記』と称す）の関連記事から、賀茂保憲が中心となって、天徳四年の内裏火災で焼亡した二振りの靈剣（護身剣・破敵剣）を再生するために行われた祭祀であるとした。その上、大刀契の資料が反閑資料に付随していることから、反閑と刀剣の関係について述べ、反閑が刀剣に代わる天皇を守護する呪術であるとし、靈剣の機能を補完し得る陰陽家としての呪的能力の

存在を示すことを明らかにした。こうした大刀契や五帝祭にまつわる資料が家祖晴明の「功績」の証明であるとともに、安倍家にとって陰陽道の家としての成立の起点を飾るものであり、それにより累代の重書と認識されたとしている⁸⁾。

山下氏の研究を踏まえ、斎藤英喜氏は五帝祭に纏わる記録が、安倍晴明自身によつて『政事要略』の編者惟宗充亮に対して功績を語ったものであるとした。また鎌倉期に成立したとされる『陰陽道旧記抄』に記載された「靈劍鑄造」に纏わる説話を挙げ、「晴明説話」へと展開していくターニングポイントであるとした⁹⁾。

またその中で『文肝抄』当該記事に触れ、「晴明説話」に対する、賀茂家の主張であるとした。それは当時、史実の上で賀茂保憲が行っていたが、それに反して安倍氏側の主張が広く行き渡っていたことを示すものであり、それに対抗しようとした意識が伺えるとした¹⁰⁾。

小坂氏は五帝祭について『文肝抄』を引用しつつ、概観を提示した。その中で、安貞二年(一二二八)に行っていたとしているが、その根拠を提示しておらず、執行されたか不明である。おそらく『左大史小槻在継記』の大刀契紛失事で挙げられている安貞二年の記事における、大刀契改鑄についての議論の事であると考えられる。

山下氏は五帝祭の成立と五帝祭にまつわる始祖伝承が、安倍家主導で伝承されていたことを述べた。斎藤氏も同様に安倍家主導の五帝祭に纏わる言説を重視する立場にある。これは安倍家側に五帝祭に纏わる資料が残されていることが要因の一つである。さらに説話伝承という観点から見ても安倍家側が晴明説話を作り上げていく過程の説話と

して注目される。しかしながら斎藤氏は広く安倍家の主張が行き渡ったとしているが、どの程度広まっているか述べていない。確かに『政事要略』という資料の性格を考えると、少なくとも小野宮流を中心として広まっていた可能性はある¹¹⁾。

この伝承は安倍家において独自の展開をし、鎌倉前期に成立したと推定される『陰陽道旧記抄』には次のような説話が見られる。

■徳四年内裏焼亡、其度切刀冊二并、為火災¹²⁾燼、後案、如元造¹³⁾鑄冊并了後、今於二柄者、皆悉依不覚非造、而晴明朝臣御式神云、若廻神通造二柄哉、式神云、頗所覚也、可造、仍以造形進上之处、勅宣、忽以難必定、若焼失以前見御刀歟、将有本様歟、其時申云、晴明只今非造形、式神廻神通所造也、敢不可狐疑、仍遣紙形於愛宕護山、七日七夜被造鑄之間、大夫殿行事、仍此賞超越上臈三人、任寮属、^{元陰陽、師也}主計頭保憲朝臣鎮二柄云々、

この説話が示すように、安倍晴明を中心として、「切刀」(節刀)鑄造が行われた。その際、晴明は式神の神通力によつて、節刀の模様を知り、鑄造することに成功する。この説話には五帝祭という言葉は見当たらないが、五帝祭の内容を踏まえた説話であると解釈できる。山下氏はこの説話を安倍家内部に伝承され、外部にはあまり広まらなかったとする¹²⁾。

ところが、五帝祭に関わる晴明伝承が広まっていたことを示す一つの証左として、十三世紀(一二六八―一二七八頃)成立の事相書、

『白宝抄』 妙見雜集を挙げる。

又云證師記云。尊星王法中節刀事。某家有大刀節刀。了後晴明以色神題之於愛宕山〔云々〕

晴明が愛護山において「色神」(式神)の力を借り、節刀・大刀を鑄造したことが記されている。先に触れた『陰陽道旧記抄』と同様に五帝祭という文言は見えないが、『陰陽道旧記抄』の晴明説話が伝わったようであり、このことは少なくとも醍醐寺系統の僧にまで広まっていたことを示している。¹³⁾ このように五帝祭にまつわる言説は、鎌倉後期には安倍家主導の説が広まっていたことは間違いないだろう。そういう状況下において『文肝抄』に記述される五帝祭はどのような意味を持つのだろうか。

まず当記事において、五帝祭を晴明の功績として語る安倍季尚について述べる。季尚は鎌倉中期に活動する陰陽師である。右京亮、権天博士、陰陽博士を歴任し、正四位下に付く。『医陰系図』をみると、安倍泰親の長子季弘の孫に当たる。仁治元年時には権天文博士であった。

山下氏によれば、『季継記』安貞二年(一二二八)正月十一日条に、嘉保の焼損のとき安倍泰長(泰親の父)は「晴明鑄劍之由」なる申状を提出していたといい、また現に泰長の子孫の前右京亮安倍季尚も「天徳晴明鑄劍之図并雜事文書」を伝えていたという。この「雜事文書」が現存する「大刀契事」の写しと推測されている。¹⁴⁾ おそらく『文

肝抄』文中に見える「季尚ノ去年勤仕之曩祖晴明之勤仕以件例可行之由、令上奏云」の一文は、この安貞二年の季尚による上奏であると考えられる。つまり季尚は五帝祭にまつわる晴明伝承の担い手であったといえよう。故に『文肝抄』五帝祭記事に現れ、安倍家、中でも嫡流季弘の流れを組む「家」の言説を語る人物として相応しいのである。またこの安貞二年の焼損の際、五帝祭を執行していた可能性があるのだ。

次に在憲が行ったとされる五帝祭について考えてみたい。在憲が陰陽師として活動していた時期の記録を見ても五帝祭が行われたという記録は見出せなかった。そこで当時、靈劍がいかなる状態であったかを考えてみる。小槻秀氏の『季継記』、および鎌倉後期の類書『塵袋』にその後の展開が詳しく記されているため参照する。¹⁵⁾

天徳四年の内裏火災の後、応和元年賀茂保憲らによって再鑄造された。その後、嘉保元年(一〇九四)十月に堀河院御所が焼亡した。その際、靈劍も焼損し、大刀櫃に焼け残った刀剣を入れ節刀とした。また、『塵袋』には節刀は別にあるとする大江匡房の説がある。安貞二年(一二二八)正月、靈劍を納める櫃の紛失事件が発生する。しかし靈劍は内侍所より発見された。

以上のような歴史的な流れにおいては、大刀契に使用される靈劍は二回にわたり被災し、賀茂保憲らが再鑄造した劍が残存したか不明である。また、この記録では在憲生前時と合致しない。

ではいかなる時代状況において在憲が五帝祭を行ったとする言説が出てきたのだろうか。そこで改めて『文肝抄』を見ると、「御願成就」

と「神器」「重宝」を再鑄造する際に行つたとある。つまり応和の頃と異なり、節刀作成時に限定して行つたわけでないことを示す。したがって「御願成就」の祈願と、「神器」「重宝」を再作成する際を祈願して行つた可能性がある。

「神器」「重宝」とは如何なる物を指しているのだろうか。

中世における「神器」については、『平家物語』『剣巻』の研究や、近年国文学の立場から提示された中世日本紀・中世神話の研究において論ぜられることが多い。¹⁶⁾ それらの研究では、院政期において神器という語義は、「三種神器」を意味するものではなかった。鎌倉後期には神器Ⅱ三種神器という認識が定着したようであり、『平家物語』『神皇正統記』や真言密教の聖教類には定着していったとされる。「三種神器」の価値観を示す資料として次に挙げる承久三年(一二二一)成立の順徳天皇編の『禁秘抄』では、先ず賢所・大刀契・宝剣神璽の順で構成されており、大刀契の項において「誠我國至極之寶物也」と記されていることから、順徳天皇にとって、大刀契は「三種神器」にならぶ、レガリアであつたことがわかる。これは、「左大史小槻在繼記」安貞二年の大刀契紛失記事に、宝剣が水没したことが記述されていることも、このような認識に基づくものであると考えられる。二藤京氏によれば神器観は歴史的所産であり、鎌倉前期には神器Ⅱ三種神器との認識は定着していなかつたとされる。¹⁷⁾ ここで『文肝抄』の当該記事に戻ると、「神器」がいかなる存在であつたかという問題がある。宮廷陰陽道の機能と天皇・王権との関係を見ると、天皇を靈的に守護することが目的であつたであろう。大刀契や「神器」を再生するこ

とも、当然その職掌であつたと考えられる。

ここで官人陰陽師が「神器」を実際に再鑄造したか否か検証してみると、在憲が陰陽頭であつた時期は、保元元年から養和二年であり、京が天災・戦災が見舞われたことは言うまでもない。しかしこの時期は大刀契も宝剣も戦禍に見舞われることはなく、在憲が実際に五帝祭を行つていた可能性は低い。そこで注目すべき人物としてその子在宣を挙げる。在宣は、兼実から「当道数輩之中、器量拔群之上」「末代之名士也、可賛美」「當時名士」と賞賛されるほどの腕前を持つ陰陽師であつた。¹⁸⁾ これは泰親の直後陰陽頭となつた賀茂宣憲に比べて、高い評価であつたといえる。¹⁹⁾ 兼実の信頼を得、中世の賀茂家嫡流を確固たるものにした人物でもある。

一方の安倍家側の人物を見ると、泰親は寿永二年(一一八三)十月には亡くなる。その跡を継いだ人物は兼実の本命日に泰山府君祭を行う泰親の三男泰茂がおり、また木曾義仲の祈禱したことで、幕府から追及された嫡男季弘がいた。このような陰陽師たちが、院政期末に起こつた王権の危機に対処していつたのである。

王権の危機を示す事件とは、源平の争乱期であるが、中でも寿永二年(一一八三)、木曾義仲入洛に際し、京から安徳天皇を伴い「三種神器」を始めとする天皇家の宝物を持ち出し、西国へ逃れたことは重大な事件であつた。その際、大刀契は持ち出されていなかった。このことは大石良材氏によれば、大刀契が数度に渡り焼損し、数を減じるとともに価値が薄くなつていたとしており、²⁰⁾ 焼損する度に神秘性を増した「神鏡」と対照的である。²¹⁾ そもそも大刀契は百済国王以来の伝統

を継ぐレガリアであるとの説もある。大嘗祭の二日目に行なわれる鏡剣奏上に使用された刀剣である可能性があった²²⁾。天皇継承のレガリアであったという点において、後述する「宝剣」と同様の価値があった可能性がある。しかし、三種宝物と基本的に異なる点として、百済よりもたらされた物具であり、神話的起源を持たなかった。それゆえに、安徳天皇を擁する平家は持ち出さなかったとも考えられよう。

ともかく王権の象徴たる「宝剣」が壇ノ浦の合戦において失われたことは、朝廷にとって非常に大きな事態であった。それは、皇位継承に関わる問題であるためである。「宝剣」「神璽」「神鏡」といった「三種宝物」は皇位継承に必要な宝物と考えられていたためである。後白河院は、「三種宝物」が還京するか否か、宝物無しで次代の天皇を継承させるなどの問題を、神祇官と陰陽寮の御卜によって判断しようとしていた²³⁾。この「宝剣」搜索に賀茂宣憲・在宣・安倍泰茂が式占を行っていたことは『玉葉』文治三年(一一八七)三月十三日条に見える。さらに『玉葉』文治三年七月二十日条に宝剣御祈を神祇官や、密教僧と共に安倍泰茂が行っていたことが確認できる。宝剣御祈が五帝祭であったか不明であるが、宝剣搜索に安倍家が積極的に関わっていたことが想定される。

後世『平家物語』『剣巻』に宝剣搜索の際、博士が占っていることが見える。この場合の博士とは陰陽博士、もしくは天文博士の事と考えられ、陰陽師であることが推定でき、文治三年の御占を基にした説話であることが想定できる。

このように、宝剣搜索に関しても、安倍家が優位であったことがわ

かる。こうした時代背景を踏まえ、『文肝抄』における五帝祭記事の意義について考えると、ひとつは従来の説で言われているように安倍家との対抗意識であろう²⁴⁾。宝剣が失われた時期は、在憲・泰親は死去しており、その子である在宣・泰茂が宝剣搜索に関わっていた。在宣は九条兼実認められるほどの優れた陰陽師であり、同様に泰茂も兼実の信頼の厚い陰陽師であった。彼等やその一家が父の顕彰に勤めたことは十分に考えられる。

そこで在憲が記述されている意義については、安倍家中興の祖である泰親との同時期に活躍したことが、五帝祭という、王権の正当性に関わる儀礼に参加したという、伝承を作り上げることにより、中世賀茂家中興の祖といえる在憲を選択したと推測できよう。それは単なる安倍家中心による伝承に対抗したというよりも、王権の危機に対応しうる「力」を持ち得る存在として主張しようとした言説であったと考えられよう。

その一方で見逃すことの出来ない点として、五帝祭は星辰の神の靈力を剣に付与することが目的であり、星辰の神に祈願する祭祀である。そこで、平安期から鎌倉期にかけての星辰に対する陰陽道における信仰を確認すると、従来天皇個人に対する本命日信仰が、貴族個人に向けられていた。また家屋に対しては、新宅において西岳真人鎮とともに、七十二星鎮といった星辰にまつわる祭祀を行っていた。

従来星・天文を扱う陰陽道儀礼は安倍家主導と見なされがちだが、賀茂家もできることを示しており、『文肝抄』においても複数の星辰を扱う祭祀が挙げられている。それは星辰・天文と陰陽道・暦道の関

係を考えれば、当然のことであるが、賀茂家が星に対して安倍家とは異なる独自の解釈を模索していた可能性がある。

そこでクローズアップされるのは、晴明と並ぶ実績を持つ始祖保憲であり、泰親と同時期に活動し中世賀茂家の祖と見なすことの可能な立場にあった在憲であるのだ。

第二章 本命祭と賀茂家の言説

賀茂在憲が天体、即ち星辰に対する祭祀を行っており、独自の解釈をしたことを示す事例を『文肝抄』から見ていこうと思う。賀茂家における中世の天体、特に本命日にまつわる言説の有様を分析していくことで、賀茂家の星に対する解釈を明らかにしていく。

本命祭^{十二前} 或廿五前^{撫物鏡}
行一具^{精進}

嘉応二年十月廿八日在憲勤之、件時廿五前之様ヲ被用ノ

保憲安和二年勤仕之支度顯然也、

本命祭は仁和四年（八八八）を初出として行われており、『延喜式』卷十六陰陽寮には御本命祭として上げられている。当初は神前二十五座であり年に六度、天皇の本命日に執行されていた。摂関期に私的祭祀が興隆するなかで、貴族個人の本命日に行われるようになった祭祀である。²⁵ 本記事においても安和二年（九六九）に行った保憲の支度の様も明らかであるとしている。

当時の記録類でこの記事における本命祭が執行されたことを示す記

事はないが、関連した記事としては『玉葉』嘉応二年（一一七〇）十月二十七日条に、泰親の子安倍泰茂が公家太一命期御勘文を九条兼実の基へ持来することが見える。この勘文は翌年の承安元年（嘉応三年）（一二七一）辛卯の厄を占った勘文である。

太一命期については、その名から太一式占からの占法であることが想定される。太一式占については小坂眞二氏の見解に基づく²⁶と、勘申部門で行われるものであった。太一定分厄は、六朝期陳の樂産撰『王佐秘珠』に基づくものとされ、太一式盤の機械的な操作で求められる人の生まれ歳²⁷の厄年説である。はじめは宿曜師が行い、陰陽師が関与するのは少し遅れ、勘申部門の問題とされる。院政期の暦注書『陰陽雜書』では、生まれた年の干支と、それに伴う年月日の干支から測定するようである。²⁷ そこで、泰茂が誰に対して勘進したか問題となるため、検討してみる。当時の天皇である高倉天皇は応保元年（一一六一）九月三日に生まれた。この年の干支は辛巳であった。そこで照合してみると、嘉応三年（一一七二）時の干支は辛卯である。『陰陽雜書』には巳歳人は丑未歳に厄がかかる事が記されている。よってこの時の勘文は高倉天皇に対するものではないことがわかる。そこで後白河法皇の生年干支を見ると、大治二年（一一二七）丁未である²⁸と見える。未歳人は卯酉歳に厄があると見えることから、後白河法皇に対して勘文は提出されたと考えられる。

さらに室町時代の暦注書『吉日考秘伝』太一定分厄年第五十二には、三、九、十五、二十一、二十七、三十三、三十九、四十五と六年周期にある厄年であることが見え、この年は死、病の厄があるとしている。²⁸

これを後白河法皇に当てると嘉応三年時には、四五歳である。よって後白河法皇に対して、勘文は提出され、本命祭も後白河法皇に対して行われたと考えられる。

太一は天皇・上皇を示す星とされ、太一定分厄年は星と厄に関わるものであることがわかる。翌日に行われた本命祭は他の記録には確認できないものの、実際に行われた可能性はある。つまり、太一定分厄年の厄を払う為に本命祭が執行されたという理解できよう。その際に陰陽頭である在憲が執行したとしても不自然ではない。

本記事における在憲の事例は通常十二の座を設けるのに対して、二十五前としている。これは、『延喜式』の形式に則り、行なったものと考えられる。本来、天皇に対して行なう形式であると考えられるが、院は天皇と同格の存在との認識があったと推測できる。一方、十二前の形式は、貴族に対し行なっていたと考えられる。陰陽道で行う本命祭について、山下氏は個人の本命日に益算・招福を祈るもので、直接星辰を対象とするものではなかったとする。⁽²⁹⁾ 紀長谷雄作の仁和四年(八八八)の本命祭文にも「天曹・地府・司命・司録・河伯・水官籍賞之神」とあり、⁽³⁰⁾ 九世紀の段階では、三官と冥官を中心として祭っていたことがわかる。

では、院政期の段階において、この認識が継続していたかの問題がある。『陰陽雜書』「北斗七星同本地」には北斗七星の各星に、本地仏が設定されている。⁽³¹⁾ 北斗七星の各星に仏を充てることは、『仏説北斗七星延命經』にも確認できるため、⁽³²⁾ 中国仏教からの影響ともいえるが、充てられる本地仏が異なっている。そこで時代は下るが室町期の暦注

書『吉日考秘伝』の記述を確認すると、『阿沙縛抄』にも同様の記述が認められ、関連性が伺えるのである。賀茂家内部で説が異なる点も興味深く検討する余地はあるが、ここでは天台密教との関連性において注目しておきたい。このことは、賀茂家が天台密教の影響を受け、本命祭に対する認識を変えていた可能性がある。⁽³³⁾

そもそも密教における本命供は直接、星を信仰の対象としていた。このことから、密教との交渉を経て、本命祭は作り替えられた祭祀である可能性はある。賀茂家と密教の関係は、本命日については、『覚禅抄』『白宝口抄』などの東密の事相書、『行林抄』『阿婆縛抄』などの台密の事相書に、天文博士賀茂保憲と法蔵の本命日論争が載せられていることから、本命日に関する言説は、賀茂家が管理するものと密教僧に理解されていたと考えられる。さらに十二世紀の台密の事相書、静然の『行林抄』北斗法本命供次第には「右次第持明房説也。付保憲様聊被加潤色歟。私云、是天文道作法也」とあり、⁽³⁴⁾ 天台密教に賀茂家の説が影響をおよぼしていたことがわかる。このように、本命日及びそれに伴う修法に関しても賀茂家の影響力が窺えるのである。

では、在憲生前時、本命日についてどのような問題が発生したのだろうか。元来本命日に行う本命祭であるが、院政期には安倍泰親・泰茂親子が九条兼実に対して、本命日に泰山府君祭を行っていたことが『玉葉』仁安元年(一一六六)十一月三日条を始めとして散見される。従来、泰山府君祭の目的は病人祈禱が主であったが、時代を経るにつれ、目的が拡大化し、多様化していったとされる。⁽³⁵⁾ この要因としては、晴明以降、安倍家の働きによるものとされる。陰陽道祭祀の内容から

考えると、泰山府君祭も本命祭と同様に、冥官を祭り、延命長寿を祈願する祭祀であった。目的や信仰対象が重複しているため、泰山府君祭を広めようとする安倍家側としては、利用しやすい状況であったとも考えられる。

こうした泰親一家の行動に対して、在憲は積極的に後白河法皇に対して働きかけていたのではないだろうか。太一命期勘文を勘進した人物は泰茂であるが、『文肝抄』に記述に従えば、在憲が本命祭を行ったことになっている。このことは、安倍家の泰山府君祭に対する対抗であったのではないだろうか。

その背景には、賀茂家が保憲以来の本命日の伝統を意識していたと考えられる。そのため、本命日に安倍家が関与することに対して、対抗意識が想定できるだろう。つまり安倍家に対抗するために、密教の星辰信仰を摂取していたのではないだろうか。

従来、本命祭は通常三官と冥官を中心として祭り、本命厄による災いを除き延命長寿を祈願したとされていた。しかしながら、院政期以降において、密教の言説を取り込むことにより、新たな解釈を賀茂家が行なっていたのだ。これが、在憲による解釈なのか、今後検討する必要があるが、九世紀末に行われた本命祭とは異なる星辰に対する解釈をしていた可能性はあるだろう。そうした視点で、『文肝抄』に記述されている本命祭について分析すると、単純に保憲と在憲が同様の祭祀を行ったとは言い難いのではないだろうか。

ここで改めて、『文肝抄』本命祭において保憲と在憲が併記されている意義について考えてみると、賀茂保憲の本命日に対する認識を継

ぐという意識の表れであると考えられよう。多様な本命日に対する解釈がある中で、保憲の名を記すことにより、「家」の嫡流意識があったといえる。

おわりに

院政期の代表的陰陽師、賀茂在憲は、その活動において、同時代の泰親一家に比べてあまり注目されていなかった。この要因の一つには、未だ中世の陰陽道の全体像が把握されていない点がある。また、従来の中世陰陽道の研究では、鎌倉武家政権との関係の中で論ぜられることが多く、³⁶⁾鎌倉に基盤を置いていなかった賀茂家は自然と軽視されがちになっていた。

本論では『文肝抄』に記述される在憲を通して、始祖伝承の形成を試みた。結果、中世の神器観や星辰信仰を背景として、在宣やその子孫である在親流によって、始祖伝承が形成・発展したのではないかと試論してみた。

そこで考慮せねばならないのは、なぜ中世の賀茂家がこのような言説創造を行ったのかという問題がある。その要因として考えられる事は鎌倉期勢力を拡大しつつある安倍家に対し危機感があったと想定される。院政期、泰親に至り安倍家出身者として陰陽頭に任じられて以降、安倍家は権門と結びつき、勢力を広めた事はいうまでもない。その背景として、情勢不安により、天文・式占を含めた占術の能力が必要とされた事は間違いないだろう。³⁷⁾院政期末は特に、宝剣搜索、皇位継承権の御占といった王権の保持に直接関わる問題の対処をせまられ

た。³⁸⁾

占術の能力に関して、泰親は高い能力を持っていた事と、自らの能力や始祖晴明の喧伝に勤めた事が安倍家の隆盛を支えた。一方、賀茂家の方では、文学作品や記録等には安倍家のような言説創造活動は薄い。これは緊急時に必要とされる天文の能力と比較した場合、造暦は日々の吉凶や禁忌に基づくものであり、政情不安な院政期末には必要でないと考えられる。こうした時代背景を基に、安倍家は興隆した。

こうした競合関係において、賀茂家は独自の展開をしなければならなかった。一つは天文の事を扱う必要がある陰陽道祭祀があり、さらに造暦は天体の運行と関わっていたことも、天文を扱う必然性がある。特に本命日に関して、密教に対して影響力を持つ言説を持っていたことが確認できた。

『文肝抄』に記述されている祭祀は、こうした言説創造によって支えられている部分と、実証可能な歴史的事実に支えられている記述によって成立している。それは家説といった陰陽道の典拠と成り得るものでもあったのである。

〔引用文献〕

- 『文肝抄』(村山修一『陰陽道基礎史料集成』東京美術 一九八七) 国書刊行会『玉葉』
『左大史小槻在継記』(『歴代残闕日記』巻三十八)
『陰陽道旧記抄』(高田義人・詫間直樹『陰陽道関係史料』汲古書院 二〇〇一)
『医陰系図』(高田義人・詫間直樹『陰陽道関係史料』汲古書院 二〇〇一)

『陰陽雜書』(中村璋八『日本陰陽道書の研究』汲古書院 一九八五)
『阿婆縛抄』(大正蔵図像部第九)

〔注〕

- (1) 本論では、賀茂家、安倍家といった陰陽道を家職とする家を「陰陽家」とする。また本論における「陰陽師」とは、官位を受けた官人系陰陽師のことを指し、所謂「民間系陰陽師」「非官人系陰陽師」のことと区別する。
- (2) 鎌倉期の陰陽家の分派については、遠藤珠紀「鎌倉期における暦家賀茂氏の変遷」(『鎌倉遺文研究』第十五 二〇〇五)。赤澤春彦「鎌倉期の官人陰陽師」(『中央大学大学院紀要』二〇〇八)
- (3) 賀茂家の各流派によって、独自の祭祀を施行していたことについて、鎌倉中期の官人陰陽師、賀茂在清の活動などに見られる。拙稿「『文肝抄』編者についての検討」(『佛教大学大学院紀要』二〇〇九)において簡略に触れた。
- (4) 山下克明「安倍晴明の「土御門の家」と晴明伝承」(小池淳一・林淳編『陰陽道の講義』嵯峨野書院 二〇〇二)、斎藤英喜『安倍晴明』ミネルヴァ書房 二〇〇四
- (5) 『平戸記』仁治元年閏十月十四日条に詳細が確認出来る。この時の御曆奏については山下克明「頒曆制度の崩壊と暦家賀茂氏」(山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院 一九九六)、遠藤前掲(2)。及び拙稿前掲(3)において解説されている。
- (6) 神前四十二座に及ぶ大規模な呪詛祭である。魚味・撫物が用物として見える。当記事には「以故殿在憲 本書写之」と確認出来る。
- (7) 小坂眞二「陰陽道の反問について」(村山修一編『陰陽道叢書』4 特論 名著出版 一九九三)
- (8) 山下克明「陰陽道と護身剣・破敵剣」(山下、前掲(5) 収録)
- (9) 斎藤、前掲(4)
- (10) 斎藤、前掲(4)
- (11) 虎尾俊哉「政事要略」(『国史大系書目解題』上)

- (12) 山下、前掲(4)
- (13) 大正蔵圖像部十所収。『白寶抄』については「続大正新修大蔵経著目録」(『昭和法寶総目録』第三)によれば、「澄円―洛東岩蔵山觀勝寺大圓房良胤資。住高野山智明院。弘安元年至正応三年(1278―1290)于時年七十三」撰集白寶抄百五十餘卷」とある。
- (14) 山下、前掲(8)
- (15) 一連の大刀契焼損記事については、大石良材「大刀契」(大石良材『日本王権の成立』塙書房 一九七五)。山下、前掲(8)を参照。
- (16) 中世神器觀の代表的な研究として、伊藤正義「熱田の神秘」(『人文研究』第三十一―九編 一九七九)、阿部泰郎「中世王権と中世日本紀」(『日本文学』三十四 一九八五)、黒田彰「源平盛衰記と中世日本紀」(『国語と国文学』一九九四年十一月号)、二藤京「中世における「三種神器」論の一端」(『高崎経済大学論集』四十九(2) 二〇〇六)
- (17) 二藤、前掲(15)
- (18) 『玉葉』文治元年(一一八五)十月七日条。同年十二月十七日条。文治三年(一一八七)十月二十五日条において安倍季弘と共に評価される。
- (19) 宣憲は『玉葉』寿永二年十月九日条の小除目の記事において、陰陽頭になったことが確認できるが、「雖無名譽、依重代衰老、被抽任歟」と兼実より批判されている。同じく文治三年六月十二日条において、兼実の方角勘文の誤りを指摘され、「尾篋之人」と見なしている。同年十二月十九日条においても同様に「素不覺之人也」と酷評している。
- (20) 大石、前掲(15)
- (21) 松前健「内侍所神楽の成立」(松前健『古代伝承と宮廷祭祀』塙書房 一九七四)
- (22) 大石、前掲(15)。大石氏は鏡剣奏上において、使用された刀剣の実態が不明であるとしている。
- (23) 今谷明「神判と王権」(今谷明編『王権と神祇』思文閣出版 二〇〇〇)

- 二)
- (24) 斎藤、前掲(4)
- (25) 本命祭については山下克明「密教星辰供の成立と道教」(山下前掲書(4)収録)。三橋正「宿曜道の展開と天皇観への影響」(三橋正「平安時代の信仰と宗教儀礼」続群書類従完成会 二〇〇〇)
- (26) 太一式占については小坂眞二「古代・中世の占い」(村山修一編『陰陽道叢書4 特論』名著出版 一九九三)
- (27) 『陰陽雜書』は院政期に活動した賀茂家栄編纂の暦注書とされる。しかし、本書を紹介した中村璋八氏によれば、第六十以降の記事は後補された可能性があるとしている。
- (28) 『吉日考秘伝』(中村璋八『日本陰陽道書の研究』汲古書院 一九八五)。続群書類従三十一下雑部に収録。
- (29) 山下、前掲(25)
- (30) 『卅五文集』(『続群書類従』第十二上)
- (31) 貪狼(釈迦)・巨人(本来は巨門)(馬頭)・禄存(勢至・普賢)・文曲(阿弥陀)・十一面・廉貞(文殊・觀音)・武曲(聖觀音・地藏・摩利支天)・破軍(虚空蔵)と本地が配当されている。ただし、中村氏によればこの記述は編者である賀茂家栄が書いたものではなく、鎌倉期以降に記述された可能性もある。
- (32) 大正蔵第二十一卷No.1307『佛説北斗七星延命經』。貪狼(東方最勝世界蓮意通証如来佛)・巨門(東方妙宝世界光音自在如来佛)・禄存(東方円満世界金色成就如来佛)・文曲(東方無憂世界最勝吉祥如来佛)・廉貞(東方淨住世界広達智弁如来佛)・武曲(東方法意世界法海遊戯如来佛)・破軍(東方瑠璃世界藥師瑠璃光如来佛)と配置されている。
- (33) 『吉日考秘伝』「貪狼―千手。巨門―馬頭。禄存―不空羼索。文曲―十一面。
- 廉貞―水面。武曲―觀音。破軍―虚空蔵」と本地の関係が示される。一方『阿婆縛抄』には「貪狼―大白衣觀音・千手觀音。巨門―馬頭觀音。禄存―不空羼索觀音。文曲―十一面觀音・独諦觀音。廉貞―

- 水面観音・深沙大王。武曲―阿嚕力迦觀自在。破軍―虚空藏。」とある。
- (34) 大正蔵第七十六No.2409『行林抄』第七十一
- (35) 斎藤、前掲(4)。及び斎藤英喜「冥府と現世を支配する神」(斎藤英喜『陰陽道の神々』思文閣出版 二〇〇七)
- (36) 鎌倉武家政権と陰陽道については、木村進「鎌倉時代の陰陽道の一考察」(『陰陽道叢書 中世』名著出版 一九九三)、金沢正大「関東天文・陰陽道成立に関する一考察」(『陰陽道叢書 中世』名著出版 一九九三)、新川哲雄「鎌倉と京の陰陽道」(『日本思想史懇話会編『季刊 日本思想史』第五十八号 二〇〇二)。佐々木馨「鎌倉幕府と陰陽道」(佐伯有清編『日本古代中世の政治と宗教』吉川弘文館 二〇〇二)、赤澤春彦「陰陽師と鎌倉幕府」(『日本史研究』四九六号 二〇〇三)。下村周太郎「鎌倉幕府の確立と陰陽師」(『年報中世史研究』第三十三号 二〇〇八)
- (37) 安倍泰親と式占に関しては小坂眞二「安倍泰親の占驗譚をめぐって」(『東洋研究』第一三二号 一九九九)
- (38) 今谷、前掲(23)

(むろた たつお 文学研究科仏教文化専攻博士後期課程)

(指導・斎藤 英喜 教授)

二〇〇九年九月三十日受理